



校長会



No.30

三重県小中学校長会 広報 第30号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail mie-kotokyokai@galaxy.ocn.ne.jp
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



私の学校づくり



四日市市立西朝明中学校

校長 西 浦 昌 宏

喜びと重圧

平成二十三年四月、実に十三年ぶりに学校へ戻ることになりました。子どもたちとともに過ごせる喜びに胸躍らせ、当たり前のようにそこへ帰っていくものと考えていましたが、その職責に改めて大きな重圧を感じていたことも事実です。そんな思いの中、子どもたちの明るい笑顔と温かい職場に励まされ、私の学校づくり一年目がスタートしました。

まずは対話

学校づくりに向かう校長の姿勢について、先輩諸氏から話を伺う中、子どもや職員と接する時間を多く持つことが第一と確信し、四月中にすべての職員と一人一時間を目安に面談を行うことと、授業と部活動を毎日見に行くことを目標に取り組みました。その後も、校長室のドアを常に開放し、子どもや職員が気軽に出入りできる雰囲気を作るとともに、短時間でも機会を捉えて話しかけることを心

がけています。

一人ひとりを大切に

本校は、周囲を森林や田園、河川に囲まれ自然が豊かで、静かな環境のもと、子どもたちの様子は落ち着いています。しかし、個々には内面的に様々な悩みを抱えており、職員には常にきめ細やかな姿勢が要求されます。そのため、職員間の情報交換を機を逸することなく行い、学校管理下の日常的な動きを全体として捉え、共有するという基本的な行動を繰り返すことで、職員の意識向上と連携強化を図ってきました。

今後も、子ども一人ひとりを大切にすることは言うまでもありませんが、職員に対してもその気持ちを忘れず、それぞれの特性を生かすことができる組織づくりをしていきたいと考えています。本年度は三学期を残すだけとなりましたが、最後まで気を緩めず、来年度へつながる取組を進めていきたいと思っています。

今日的課題の克服に向けて

元氣と笑顔が輝く

学校づくり

家庭・地域の教育力を生かして

桑名市立大山田南小学校

校長 渡辺 美紀



本校は、桑名市西郊の大山田地区南に位置した穏やかな住宅地である。全校児童は、二百七十六名。昨年創立二十周年を迎えた。

フェスタや防犯活動など街づくりに熱心に取り組んでいる地域である。また、PTA、青少年育成会議、民生委員、自治会など様々な組織が、子どもたちの健やかな成長を支えるため協働している。多様な趣味や特技を持っている方も多く、教育への関心も高い。学校・家庭・地域の共通の願いは、子どもたちの「やってみよう、がんばるぞ」という元氣（意欲）や「わかった、できた、やった」

という笑顔（満足感や達成感）が輝く学校である。そんな活力のある学校を目指し、家庭・地域の教育力を生かして、子どもたちの主体的な学びを支える環境を整えたいと考え、連携して取組を進めてきた。また、「たくましく心豊かな子どもを育てる」を学校目標に、人との出会いや豊かな体験活動の充実に努力している。

豊かな教育環境

様々なボランティア活動に支えられ、安全・安心、豊かな感性を育む環境づくりを推進している。（花の栽培、リース飾り。本の読み聞かせ、お話会、本の修理。草刈りや遊具等のペンキ塗り、机の天板取り替えなど環境整備。防犯パトロール。あいさつ運動。など）児童集会では、ボランティアの方をお招きし、交流を深めている。地域の方々に温かく見守られている自分に気づき、感謝の気持ち伝えるよい機会となっている。地域とのつながりや人との出会いを大切にした授業

昨年度、地域の人材を活用した教育活動を充実したいと考え、ス

クール・サポーター等の再募集を行った。約八十名の方が「人材バンク」に登録してくださり、出会うや体験を通して心がわくわくする授業を展開することができた。（一年生は手話ソング・昔遊び、二年生は虫探し、三年生は町探検・リコーダー・昔のくらし・焼き餅体験、四年生は点字・手話・車いす体験、五年生は韓国料理・桑名の千羽鶴、六年生は理科実験・邦楽体験・合唱・製作など）

人や自然とふれ合う体験に、子どもたちは目を輝かせ、生き生きと学ぶ姿が見られた。また、多様な価値観にふれ、自分の考えを広げたり深めたりすることもできた。

家庭・地域とともにつくる行事

青少年育成会議・PTA・学校で実行委員会を組織し、民生委員や自治会、長寿会と連携しながら「南風フェスティバル」を企画運営している。今年で四回目となる。

今年は、地域で生まれた応援歌「みなみかぜになろう」の合唱で始まり、午前中は、児童の学習発表会。その後、地域の先生を招いてのサイエンスショーを行った。午後からは、地域の人たちを講師として様々な講座が開かれた。昔遊びや将棋・レクリエーション・大型絵本や手品・寄せ植え・バルー

ンアート・竹とんぼ・筒鉄砲・プラバン・エコクラフト・紙すき・パソコンなど約七十名程の保護者や地域の人たちが、趣味や特技を発揮して、様々な体験と交流ができる場を創り上げてくださった。毎年、子どもたちは、この出会いと体験をとても楽しみにしている。また、保護者や地域の方から「子どもたちといっしょに活動することで自分自身も元氣と笑顔になりました」という声をいただいた。これからも、家庭・地域とともに歩む学校でありたいと思う。

地域の接着剤として

亀山市立加太小学校

校長 森川 幸雄



「新しい公共」と言われます。

確かに行政がモノとカネをつぎ込んで課題を解決する時代は終わりました。高度経済成長期に生まれ育った私には、子どもの頃、今日より明日、明日より明後日と生活がどんどん良くなるイメージが

あったことを思い出します。それは、物質的側面の強いものでしたが、周りの大人や社会全体も元気で、活気を感じました。少子高齢化やグローバル化を背景に、そのイメージが幻想となった今、新しい公共という言葉とともに、個人の価値観の変換やコミュニティの変革が問われています。即物的なものだけではなく、所謂「お上」ではない「公」に対する社会的貢献を果たしたときの充足感に価値を見出すということでしょうか。

さて、本校は、亀山市西部の山間に位置します。加太地区の人口は千百人ほどで、児童数は五十三名です。次年度は、四十六名と減少予定で少子高齢化の波をまともに受けている状況です。とは言え、名阪国道やJR関西本線が通るこの地域は、個々の生活にとって不便かと言えば決してそうとも言い切れず、個人レベルでの過疎意識は薄いように思われます。しかし、地区全体を見た時、児童数の減少は、やはり大きな課題です。

そんな中、本校は、平成二十二年度からコミュニティ・スクールの研究指定を受けています。私は、研究指定二年目に本校に新任校長として赴任しました。コミュニティ・スクールとは？地域の特性

は？まず、自分自身が理解することから始まりました。また、地域への露出を多くして顔を覚えてもらうことにも時間を費やしました。

この間、学校では地域や保護者の協力を得る行事をたくさん実施しました。もともと、本校は地域にお世話になる行事が多く、運動会や秋祭りなどはコミュニティとの共同実施です。また、登下校の見守りなどにもご尽力をいただいています。そこで見えてきた課題は、行事の形式化と負担の一部への集中及び登下校の見守りなどの全体像把握の不足です。多くの行事を実施していますが、子どもたちにとってどういう教育的な効果があったのか、目的達成のための改善点は何かなどを、学校と地域や保護者が十分に議論しないままに行事を実施してきた感がぬぐえません。また、行事の実施にあたり、その負担が一部に集中し、徐々に立ち行かなくなってしまう行事もあります。登下校の見守りなども含め、注がれた労力や時間を十分に活かしていきたくないのでは。結果、成果に対する充足感や達成感、有用感を十分に得られていない実態があると思います。

現在、コミュニティ・スクールの指定に向けて三つの部を組織し、

会長や部長・副部長をはじめとした方々と課題解決に向けた熟議を始めています。主なテーマは、各種行事の再認識と再整理及び参画者の裾野の拡大です。地域との本格的な対話が始まったことは嬉しい限りですが、この対話そのものも負担となる側面を持ちます。負担感が満足感に変わるには、子どもたちの変容、PTAを含めた学校の変容、地域の変容が実感として持てることが重要です。その実現が校長の使命と考えています。

コミュニティ・スクールが、より良い地域づくりの接点剤として機能すること、そこで育つ子どもたちが、地域づくりの担い手としての当事者意識を強く持てる人間に成長することを目指します。

極小規模校の課題

熊野市立飛鳥中学校

校長 五味 正 樹



本校は、紀南地域では最北部の山間地にあり、全校生徒が二十五

名（一年生八名、二年生六名、三年生十一名）の小規模校である。平成二十一年度末に校区の三つの小学校が統廃合し、平成二十二年より一・小一中の校区になった。今後数年間は、生徒数が二十人から二十五人で推移していく予定である。

生徒は純朴であり、性格も素直で礼儀正しく、学校行事や部活動などにも常に一生懸命に取り組んでいる。しかし、小規模校であるがゆえの課題もある。これだけ少人数であるならば、同級生の間ではもちろん、一年生から三年生まで全員が仲良く、言いたいことを言いあえ、喜びも痛みも共有できる仲間であることを望みたいところである。しかし、現状では生徒それぞれが心まですぐに解け合っているという状況になっていない。そのため、会話のなかに人を平気で傷つけるような言葉があったり、自己表現がうまくできなかつたりするために誤解を招きトラブルに発展することもある。小さな学校では、よく言われることであるが、自己表現力不足やコミュニケーション能力不足などによるものであると考えられる。もつと一人ひとりがうち解け合い、心身ともにお互いをぶつけ合いながら、楽しく学校生活を送ってほしいものである。

また、学習面に関しては、授業態度は良く、落ち着いて授業を受けているが、お互いに切磋琢磨するというような意識が乏しいように思われる。

こういう実態のもと、生徒の学力向上と生徒同士の関係性の向上をめざす取組をすすめている。

〈生命・人権の尊重を基盤とした「豊かな人間性」を育む教育の推進〉

生徒一人ひとりが、自分を大切にし仲間を大切に、思いやりのある行動が取れるようにすることを目的としている。

具体的には、「校内人権フォーラム」として、全校での縦割りグループをつくり、テーマを決めて話し合うことで、お互いを出し合える関係づくりをめざしている。これまで二回行ったが、話し合い後の生徒の感想をみると、やはり普段はお互いに本音でしゃべることができていない一面があることや、何年間も近くにいた友達のことでも知らないことがあることに今回初めて気づくなど、取組の成果を感じることができた。しかし、せっかくなので本音でしゃべることができてその時だけで、その後の行動に結びついていない実態もある。もつと回数を重ねることも必要であるが、それ以上に日常に

おける教師の仕掛けのある取組が大切であると感じられる。

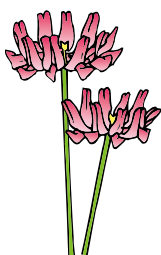
〈生徒一人ひとりに、毎時間学びがある授業の推進〉

近隣の中学校の「学びの共同体」の取組を参考に、グループ学習を取り入れた授業を実施している。学びの楽しさが実感できるように工夫し、学力とコミュニケーション能力の向上を目標に各学級で授業研究を行い、意見交換し授業改革に努めている。また、「学びの共同体」の取組そのものが、仲間づくりにもつながり、人権学習の一環でもあると捉えている。

〈他校との交流の推進〉

限られた少人数の仲間以外とのコミュニケーションをすすめるために、校区の飛鳥小学校や隣の五郷中学校との交流授業を定期的に行っている。今年度から運動会も小中合同で開催し、さらに交流がすすんでいる。

今後もこのような活動を通して、生徒同士の関係性の向上と学力の向上をめざしたい。



随 想

教育も繰り返す

鈴鹿市立旭が丘小学校
校長 土屋 修 三



「歴史は繰り返す」というが、教職三十八年を振り返ると、「教育も繰り返す」という思いが強い。最近、この感を強くさせる出来事が二つあった。

一つ目は、四月に改訂された教科書である。前の教科書と比べてその厚さと内容にびっくりした教員が多かったと思うが、「ゆとり教育」が始まった時の教科書の薄さに驚いた者からすると、「何だ十年前の教科書に戻っただけか」ともとれる。私が教員になった頃は「教育の現代化」のもと、「読

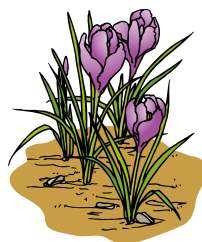
み・書き・計算」など、「教える」ことを重視した教育が全盛であった。しかし、この頃のカリキュラムはあまりにも濃密であったため、落ちこぼれや非行問題を生むこととなり、この後は「育む」ことを重視した「ゆとり教育路線」へと大きく舵を切っていった。

ところが、学力低下が社会問題化すると、再び「読み・書き・計算」が見直され、現行の「脱ゆとり教育」へと変わっていった。十年後には、学習指導要領がまた改訂されるが、その時は、一体どちらに向かつて進んでいるのか、楽しみでもあるし心配でもある。

二つ目は、若い教職員の増加である。本校は、毎年三、四名の新採教職員が入って来る。このよう

なことが続いているため、本校の教職員の平均年齢は、三十八歳である。他校と比べると、九歳ほど若い学校である。

激増することは避けられず、三十年代前と同様に、難しい学校運営が求められるのは確実である。



不登校の子らと

ともに

松阪市立西中学校
校長 高橋 光彦



私の中で教育への思いが変わりだしたのは、九十年に適応指導教室を担当するようになったころからでしょうか。

当時はまだ「登校拒否」といい、社会の登校圧力は今とは比べものにならないくらい強く、その中で、

親も子もまるで生気がなかった。「登校拒否」の数が増え、やがて「不登校」となったころ、不登校への理解が進み、社会の圧力が緩まる中、ようやく、親も子も「狭かった肩身」を少し広げることができるようになった。しかし、こ

の子らの人とかかわる力の脆弱さには目を覆いたくなるばかりだった。多くの不登校の子らの「生き苦しさ」を目の当たりにして、この子らには「人とかかわる力」が十分に育っていないなと思いはじめた。私と同世代の人はそうだろうが、小学生のころは、まだま

だ、皆が空き地や原っぱで群れて遊んでいた。そうして人とかかわる根つこの部分を学んできたものだ。空き地での遊びが消えるにつれ、子どもどうしのつながりが弱くなった。不登校をたどればこんなところにも遠い原因があるのだろう。

その後、不登校の子らとの関わりから、「人とかかわる力や自分を肯定できる内面を育てなくては」と考えるようになった。それは、知的好奇心を高め、知識や技能、考える力をつけることの重要さはもちろんだが、それとともに教科・領域に亘ってコミュニケーションの力を高めたり、内面

の成熟を図っていくことも同じように重要だとの思いである。そして、思春期を揺れながら生きる彼らに、「しんどい思いもあるだろうが、より良く生きろよ、自分を見つけよう」と願いながら、対応してきた。

児童期、青年期の時期に、人と関わる力を高め、豊かな関係性を得ることは、その後の人生に強く影響するもの。これらの力を育むことは不登校だろうが、不登校でなかるうが、必要だと今も思っている。

以来、九年が過ぎた。その後、教頭・校長として勤務した中学校では、あかんもんはあかんという父性と共感的な関わりをもとに「心のやりとり」ができる教育相談を先生方をお願いしてきた。危うさを持ちながらも思春期の躍動はまばゆい。

これまで、中学生とのかかわりを仕事とすることができたことに感謝し、ここで区切りをつけたいと思います。



特別寄稿

三重の教育への思い

三重県教育委員会学校教育分野総括室

総括室長 白鳥 綱 重



昨年四月に三重に初めて足を踏み入れてから、早一年近くが経過しようとしている。昨年放映されたTVドラマ「高校生レストラン」の影響もあって、「～やに」など伊勢弁っぽい言い回しを時折口にしてみるようなにもなり、三重県民らしさも少しは板についてきたのではないかと自負している。

三重県民は人柄が温かく、和を重んじる日本人の美徳がよく根付いていると思う。また、土地が豊かで全般的に温暖な気候であり、三重県の幸福度も高いと聞く。「三重県民は全国の真ん中ぐらいい好む」といわれるが、これは、こうした県民性や豊かさによるところ

が大きいのであろう。

他方、ここ数年の全国調査によれば、三重の子どもたちの学力や体力の状況は、全国平均に比べて芳しい状況にはない。とはいえ、このような状況については、この一年の間に、県民の関心・危機意識が急速に高まってきたと感じている。

特に昨年は、東日本大震災や欧州発の金融不安など、世界的に大きな動きがあった。これからの三重を支え、また、激動の時代を生き抜いていける人材を育成していくことが、これまでにも増して求められる。県民意識の高まりは、こうした状況の変化を強く反映したものと考えられる。教育行政、そして学校現場は、こうした県民の期待に真摯に応える責務がある。

ところで、国連のイニシアチブに、「ESD（持続可能な開発のための教育）の十年」がある。これは、二〇〇五年から二〇一四年までの十年間のイニシアチブであ

り、最終年の会合は日本（メイン会場は愛知県・名古屋市）で開催される予定である。最終年会合は、日本の教育を世界に発信する絶好の機会でもある。

ESDは、「持続可能な社会を支える人づくり」を「教育」を通じて実現しようとするものであるが、そのような人材たりうるためには、「自立する力」と「共に生きる力」を備えていることが不可欠といえる。いうまでもなく、これらの力は、三重県教育ビジョンにおいて、「子どもたちに育みたい力」として位置づけられているものである。

これらの力を育むために、学校が主要な役割を果たすことはいうまでもないが、他方で、教育は学校だけのものではない。子どもたちの学力等の状況を、学校から家庭・地域に向けてしっかりと発信し、必要な協力を仰ぐことも必要である。全ての関係者が、子どもたちを取り巻く課題とその解決に向けて方策を共有し、実施することによって、「県民総参加」により子どもたちを支える体制が実現する。三重の良さである「和」の精神は、ここで遺憾なく発揮されるところと考えている。

子どもたちの輝く未来づくりに向けて、引き続き、学校現場の皆様と共に取り組んでいきたい。

事務局だより

24 年度 年間行事予定

総 会 等	退職校長感謝の集い 4/14 総会 4/24 都市会長会議 5/10 2/12	全 連 小	総会 5/25 奈良大会 10/25・26
代 表 者 会	4/19 5/15 6/19 9/13 11/20 1/17 2/19	全 日 中	総会 5/23・24 大阪大会 10/4・5
学 校 経 営	5/15 6/19 7/12 8/24 9/11 11/20	東 陸 連 小	愛知大会 10/18・19
進 路 指 導	5/10 6/7 7/3 9/20 10/16 11/13	東 陸 中	愛知大会 7/5・6
生 徒 指 導	5/15 6/19 8/7 10/23 11/20		
広 報 特 別	4/26 6/19 9/13 11/20 1/31		
小 学 校 部 会	5/15 6/19 9/13 11/20		
研 究 大 会	打合会 6/28 研究大会 7/31		
代 表 者 会	4/19 9/13 1/17 2/19		
県 大 会 実 行 委 員 会	5/17 6/5 7/12		
中 学 校 部 会	8/21		
代 表 者 会	4/19 9/13 1/17 2/19		
研 究 委 員 会	5/17 6/21 10/11 11/22		
全 連 小 三 重 大 会	5/21 8/10 11/8 2/12		
実 行 委 員 会	4/26 6/14 7/17 9/4 10/9 12/6 1/15 3/7		
事 務 局 会			
4 部 会	各部会別開催		
9 委 員 会	各委員会別開催		

★お願い

- (1)平成 24 年度年間行事予定を考慮し、各種会議のご計画をいただきますようお願いいたします。
- (2)現理事さんを通じ、下記の提出物をお願いいたします。ご協力ください。(締切日)

①都市役員・県委員等の名前報告	(4/6)
②総会代議員出席者名簿	(4/13)
③三重県小中学校長年齢別表	(4/19)
④日本教育会	(5/11)

※提出については、新理事さんでよろしく願います。

本部役員だより

一年を振り返り最近思うこと



三重県小中学校長会
中学校部会長 鈴木 一 良

平成二十三年度の校長会がスタートしたのは、東日本大地震発生後、間もない時期でした。自然災害の恐ろしさに日本中が震え上がり、当たり前の生活を送れることのありがたさをかみしめながらの新学期であったと記憶しています。

三重県内においても大雨による災害が発生し、自然災害におびえながら、校長会では積極的に被災地への支援に取り組んできました。各学校においても生徒や職員の安全を守るために、防災教育や減災教育に取り組んでこられたことと思います。

このように本年度は「教育」の重要性を再確認し、活動を推進する年となりました。役員会、小・中学校部会、理事会、専門部会では教育課題を明らかにし、関係機関や団体と連携し

ながら、調査研究・課題解決に努めました。また、教育充実発展に関する施策・予算についての県教育長との懇談会、より良い進路指導を求めた入試制度検証会、いじめやネットモラル問題等の解決や安全・安心な学校づくりの支援、近府県における教職員育成支援システムの状況調査や分析を行いました。さらに、校長会だよりやHPを通して情報提供と会員相互の連帯意識の向上を図っています。

こうした活動が推進される中で、各校長先生方におかれましては日々、被災された方々に思いを寄せ、とりわけ「命の尊さ」については重く取り上げると共に「今、自分に何ができるのか」を生徒に真剣に考えさせ、将来に向けて社会貢献することの尊さを説いてこられたのではないのでしょうか。

この話は昔、インドへ旅行した

人から聞いた話ですが、インドのある学校を訪れた時、門に「WE COME TO SCHOOL TO LEARN」と「WE GO OUT TO SERVE」という言葉が掲げられていたそうです。

登校する時に生徒が目にする看板には「WE COME TO SCHOOL TO LEARN」。「LEARN」には「学ぶ」の他に「身につける・習得する」という意味があり、知識を得ると共に様々な体験を通して「知恵」や「生きぬくために必要な力」を身につけることを意味しています。

下校する時に生徒が目にする看板には「WE GO OUT TO SERVE」とあります。「SERVE」は「人のために尽くす」という意味です。この学校の生徒は、「様々なことを身につけるために」学校に来て、「世のため、人のため、役立つため、奉仕するために」学校を出て行くのです。

目の前にいる生徒が社会に出たときに、世に貢献できる人として送り出すところに教育者としての大きな使命を感じさせられました。

実践的専門集団である私たちは今後も「有言実行の校長会」として「不易と流行」を見極めながら、生徒の輝く未来のために「学校からの教育改革」の完成をめざし、着実な歩みを続けたいと思います。

私の薦める一冊

心を穏やかにしてくれる

「すてきなあなたに」



南伊勢町立南島東小学校
校長 竹 内 誠

日常生活の中で、子どもたちに

関わる様々な課題や学校運営や保護者への対応等々に追われることがよくあります。そんなことが重なる、ふと自分の心にゆとりがない、少し雑になっている、心が疲れている・・・と感じることがあります。そんな時、私は座禅をすることや以前から読み親しんできている「すてきなあなたに」に触れ、自分自身に向かい合うことを心がけています。

「すてきなあなたに」は、【暮らしの手帳】連載と同じタイトルのエッセイを大橋鎮子さんが編集したもので、昭和五十年の一卷から始まり、現在五巻目が発刊されています。私が昭和五十年に教師としてスタートした時に出会い、そ

れ以来、親しんできています。そこには、日本語の折り目正しい美しさを感じるだけでなく、大橋さんの気配りの細やかさ、相手の気配りの細やかさに気づくことができる心配りや繊細さを感じ取ることができものが綴られています。

あわただしく、物事の対応に追われがちな一日の中で、ふと見過ごしてしまいがちになる心のゆとり。この本を読むと、心が和やかになるとともに、温かさを取り戻すことができます。また、物事への考え方や生き方、生きていることの素晴らしいさを深く感じることができのです。

「すてきなあなたに」は、日頃のちよつと素敵で、自分だけにとめておくことがもつたいなくなる物事が季節ごとに分けられ、優しく上品、知的で気取りのない文章として、ひとつひとつ短くて穏やかな表現で綴られています。発刊されてから随分時間が経過しているのですが、今読んでもとても新鮮な内容で心に響いてくるものがあります。また、花森安治さんのさし絵や装丁もなかなか味があこもった温かさを感じることができます。

身近にいて、生き様を教えられる本のひとつとして「すてきなあなたに」があります。

あの時、あの人



特別支援学校での

出会い

津市立高岡小学校

校長 高田 明 裕

今回の原稿作成にあたり、自分の歩みを振り返る中で、どの時期にも素晴らしい出会いがあったことを思い起こしています。どの時期のことを書くこうかと迷う中で、特別支援学校（当時の養護学校）に勤務し、子どもたちから学んだことを書くことにしました。

特別支援学校では平成元年からの九年間を過ごしました。それまでの小学校での生活では、コミュニケーションをとる手段は言語だけで十分でしたので、表出言語がまだなく、言語理解も十分でない子どもたちの思いをくみ取り、こちらの思いを伝えることに一番苦労しました。

また、指導のまずさを痛感する経験も数多くしました。小学部一年生の服の着替え指導を行ったと

き、その中にいたAさんはボタンかけが苦手なようでしたが、一生懸命に止めようとしているので、私は「がんばれ、がんばれ」といった声かけをして待ちました。しかし、独力で時間内にボタンを止めることはできませんでした。実は、Aさんは、目と手の協応が十分でなく、ボタンを摘むことと、摘めても上手にボタン穴に通すことができないことを後で知りました。

このとき、Aさんに本当に必要だったのは「がんばれ」といった情緒面での支援でなく、手を添えて一緒にボタンを穴に通してあげるといった技術面の支援であったことを教わりました。

以後、服のボタンを大きな目のものに付け替えて練習したこと

や、遊びや学習面でペグ差しや、ビーズ通しといった教材・教具を使うことで、巧緻性は養われていました。きまじいですが、どんなときに、どんなことを、どのように行なうかといった支援の内容や方法は、個々の子どもの特性や実態を十分に把

握した上でないといけないことを学びました。

特別支援学校での子どもたちとの生活で、心が洗われる経験を数多くしました。また、特別支援教育の基盤となる考え方を学ぶことができたと感じています。



桜の友

志摩市立越賀中学校

校長 長谷川 達之

「ちょっと やっていかんか」

てくれた。

三年前、前任校の神島小学校で、学校から職員寮への帰宅途中の山道で声をかけられた。島の郵便局長さんと、子育ても一段落を終えた六家族の同級生仲間が、桜の木の下で、海の幸を並べて大宴会。私もいっしょに仲間に入れてもらった。いや、引きずり込まれた。

神島へ赴任して、飾らず、きどらず、うれいしときはいっしょに喜び、悩むときははいっしょに悩み、腹が立てば時には言い合いもする。そんな、人と人がつきあう上で当たり前のことを思い出させ

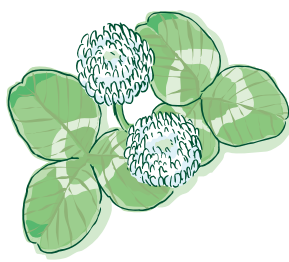
と思ったら、「強風のため、今日一日欠航します」の島民放送がかかった。

結局、郵便局長さんの家に二日間お世話になってしまった。

時間もあるので、みんなで「潮騒」の舞台となった監的哨に登った。久しぶりの監的哨は、島の中学生によって落書きも消され、草木も島の人によってきれいに刈られ、美しく整備されて輝いていた。三浦友和になった気分。遠方に見える伊良湖岬を眺めた。三百六十度の眺望があり、絶景であった。

今いる越賀も潮の香り、人の温もりに包まれた町で、子どもたちを家族のように優しく見守っている。

桜が咲く頃になれば、また「桜の友」からの便りが楽しみになる。この土地でも何となく新たな「桜の友」ができるような予感がする。



地区校長会だより

いなべ郡市小学校長会

信賴のもつ Trusting Together

員弁郡いなべ市校長会は、郡市二十七校（中六校・小二十一校）の校長で構成されています。年間十三回の定例会、四回のテーマ別研究会と三回の合同研修会、研修視察等が主な活動です。

郡市二十七校では「チーム○○」を合言葉に、校長と教頭・教職員が、信賴のもと一枚岩になって「学校力」を高める取り組みを進めています。

もとより員弁郡市では、長い歴史を持つ「員弁の教育」の名のもとに授業づくりと集団づくりが進められてきました。今、私たちは、この礎のもとに、新しい「員弁の教育」に取り組んでいます。それは「学力向上を旨とした授業改善」です。具体的には、指導の統一や授業スタイルの統一・QUやSSTの活用・NRTやCRT等の客観的評価の活用・指定研究校や自主研究校の画期的な研究等です。子どもたちが迷わずに通しを持って学び、学習意欲と生活意欲



を向上させることができるようにさまざまな実践を進めています。

また、『途切れない保幼小中の連携』も進んでいます。日常的な連携はもちろん、CLMチェックを活用した保小の特別支援教育の連携・学力向上を旨とした小中の授業づくり研究・卒業時入学時の細やかな連携・授業スタイルの共有化等、各中学校区において積極的な実践が見られます。

そして、これらの実践の軸になるのが、各校長の学校経営のビジョンと経営力です。それを磨くために、私たちは校長会で学び合い、交流し、「チーム校長会」として信賴のもとに歩んでいます。

津市中学校長会

“輝きプロジェクト”

平成二十四年がスタートしました。六年前の一月一日に十市町村が合併、現在の津市が誕生して、早七年目となりました。

津市は東部の伊勢湾を臨む地域から、西部の山間地域までの広域に二十一の中学校（付属中を含む）があり、それぞれが地域と連携し、特色ある学校経営を実践しています。

津市教育振興ビジョンの基本目標は「夢を持ち、国際社会に生きる自立した元気な人づくり」です。その実現には、子どもたちの「生きる力」を育むことが不可欠であり、子どもたちや地域の特性を生かしながら学校・園の独自性のある学校づくりを行っていく必要があります。

その中で、教育内容の向上を図っていくためには、学校・園が組織として、子どもたちに「学び」の場を提供し、学校の中に子どもたちの「学びの意欲」を育むプロセスを創り上げることが必要になってきます。そこで津市では、子どもたちの「学ぶ力の育成」を目指した持続的な教育活動への取組を支援するため“輝きプ

ロジェクト”と銘打った事業を平成二十三年度から、全小中学校と公募のあった幼稚園で実施しています。

津市中学校長会は、毎月一回の定例会ならびに、必要に応じ臨時の校長会を開催しています。

校長会の中では、ベテランの校長から初任の校長まで個性あふれる二十名が、和気藹々とした自由な雰囲気の中、津市の将来を担う中学生の教育について、毎回活発な意見交換がなされています。

特に来年度から実施される新学習指導要領を受けて「輝ける学校」を目指し切磋琢磨していきます。



編集後記

日差しに春を感じるようになりました。各校では卒業式の準備や年間のまとめに、忙しい毎日をお過ごしのことと思います。また、中学校では、新学習指導要領の完全実施に向けて、万全の体制づくりが行われていることと思います。さらに、東日本大震災発生から一年が経とうとしている今日、長きにわたり東海・東南海・南海地震の発生が心配されている三重県では、防災教育の見直しや、地域の防災拠点としての学校の役割の大切さを再認識して、新たな視点からの取組がすすめられているところです。

さて、「校長会みえ」も年間三回の発行を無事に終え、本号が今年度の最終号となりました。執筆していただいた皆様に心より感謝申し上げます。県内各地の校長先生方の学校経営や生き方に学んだり、楽しい記事にほっと心を和ませたりすることができました。来年度も、県内各地を結び、各校・各地区校長会組織のさらなる充実に役立つ会報となるよう、紙面の充実を図っていきたいと思います。引き続きで愛読いただきますようお願い申し上げます。